

弥生の生活を体験！ 石庖丁を研ぐ

実りの秋となりました。稲穂が垂れ、すでに収穫を終えた田も見られます。弥生時代の人々は、稲穂を石庖丁や木庖丁で刈り取り、収穫していました。

展示館では、8月20日に夏休みこども体験として「石庖丁づくり」に挑戦しました。

弥生から時を超えて

青谷上寺地遺跡

県内産の薄く割った粘板岩を材料にし、海岸で拾った安山岩を砥石として使い、まずは研ぐことから始めます。粘板岩は軟らかく加工しやすいという指導者の説明にもかかわらず、1時間経ってもなかなか刃は研ぎ出せません。

やっと刃を研ぎ出したところで、紐を通す穴を開ける作業に移りました。サヌカイトという石を舞キリの先端につけ、火起こしの要領でキリを

回転させます。これも参加者を手こずらせ、1時間で1つの穴が貫通したのは、1人だけ。残りの穴は、仕方なく電動ドリルで開けました。

弥生時代の人々は、この作業をどれくらいの間で行っていたのでしょうか。弥生人の技と、遠くから原石を運ぶ当時の苦労に感心させられました。私は、半日かかっても研ぎ上がらない石庖丁を、グラインダーで削って刃をつけました。

イネの収穫のようすは、次回(12月号)でお伝えします。



砂と水をつけながら研ぐ



舞キリで穴を開ける

因幡万葉 夢幻譚

現代から万葉の世界へ旅をする私こと「万葉の旅人」が大伴家持と語り合う夢物語

巻九 妻から形見が贈られてきた

旧暦九月、つい中秋には薄を立てて秋の豊作を祈ったばかりなのに、稲田には赤蜻蛉が心地よく黄金の波間に揺れていた。

「山陰道諸国にも、新羅征討のために軍船一四五隻の建造が命じられたとのことですが、いよいよ戦が始まるのですか」と私が問えば、「時の宰相藤原仲麻呂殿は、どうも本気らしい。海岸防備や軍団の準備も進めねばなるまい」という家持さんの目に一瞬緊張がのぞいた。

刈り取った稲田に遊ぶ白鳥が一羽、稲穂を加えて飛び立った。「今年はずっと稲羽郷から、稲田の初穂で編んだ稲藪が届いたそうで」と私が言えば、「元旦の降雪は豊作の吉兆であった」と答える家持さんには国守としての満足感が漂っていた。

「奥様から贈り物が届いたぞ



奈良時代の兵士

うですね。いつもお熱いことで

「と私がからかえば、「この形見は妻が身に付けていたものなのだ。秋風寒いこの頃、衣の下に着込み妻を偲ぼう」と嬉しそうにひと撫でして家持さんは呟いた。

「都にいた時は、五月と八月に農休みがあった。よく竹田(現檀原市)の農園に出かけて、田植えや稲刈りを監督したことだ」と家持さんが懐かしそうに言うので、「まさに田園の貴公子だったのですね」と私が返すと、二人とも大笑いしてしまっただけだった。続く…。

「万葉ひとの形見」

死に別れた時だけではなく、生き別れのときにも贈答する。恋人や夫婦の場合は、互いに贈答することが愛情表現であった。

万葉クイズ

- (先回の問題) 秋の七草は、尾花、撫子、女郎花、藤袴、朝顔と何の花?
- (解答) 萩
- (今月の問題) 妻が贈ってきた形見とは何?

答えは12月1日です。



©鈴木靖将